法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

中上健次『浄徳寺ツアー』：「ヒロちゃん」の「ツアー」

宮嶋，有華

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
88
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
43
(発行年 / Year)
2013-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010243

Hosei University repository

中上健次『浄徳寺ツアー』
――「ヒロちゃん」の「ツアー」――

宮嶋　有華

序

中上健次にとって三度目の芥川賞候補作品ながら、作品そのものを論じられることが少ない『浄徳寺ツアー』。芥川賞の選考委員・吉行淳之介には「個人的な憤りをたたきつけている[1]」と評された作品だが、はたして「個人的な憤り」が中上にこの作品を書かせたのだろうか。その疑問を念頭に、妻の出産予定日当日であるにもかかわらず、知らない寺の檀家たちによる、名所・浄徳寺への団体旅行に添乗し、同行する愛人との性交しか頭にない「彼（ヒロちゃん）」が主人公である意味はどこにあるのか、考察する。

なお、本稿において特記のない引用はすべて、中上健次『浄徳寺ツアー』による。

一　「ツアー」を率いる「彼」

スクランブル交差点で、彼は、念のためと数えてみた。

これが『浄徳寺ツアー』の書き出しである。添乗員である主人公の職業を強調するこの一文に導かれ、読者は作品中の団体旅行「浄徳寺パッケイジツアー」の一員となる。

まず、この団体旅行に、主人公によって「ツアー」という呼称がつけられたことを注視したい。奈良・平安の昔から日本人は、寺や神社といった聖地へ赴くことを「参り」「詣で」と呼んできた。浄徳寺へのこの旅行は、「お伊勢参り」同様「浄徳寺参り」と呼ばれてしかるべきものなのである。では「参り」などと「ツアー」との決定的な違いはなんだろうか。それは目的地への意識の違いにある。「参り」などでは、目的地で信仰

Hosei University repository

対象へ自ら働きかけることに主眼を置くが、「ツアー」では、メインに掲げられる目的地は通過ポイントの一つでしかなく、その場所への強い思い入れや信仰対象への働きかけなど必要ではない。出発地へ戻ることを前提とした、観光ポイントの通過の積み重ねこそが目的であり、「各ポイントを経て出発地へ戻る」円環構造を持つものが「ツアー」であるといえる。

駅から浄徳寺までの、バスを使ってもよいほどの距離について、ツアー主催の和尚は予算的なもののほかに「すこし歩いたほうが、またそれで浄徳寺の有難味も増そう」という理由を挙げ、徒歩での移動を選択する。宗教の俗物性を浮き彫りにすることを意識したものであるともとれるが、本稿では和尚の言葉通り、自らの脚による移動の過程に価値を見出すという素朴な価値観に留意したい。

次に、主人公「彼」について整理する。「彼」は和歌山県出身で二八歳の既婚者、「ひょろ高いビルの四階」にある旅行会社に勤めており、同じビルの一階にある会社に勤める「関口由起子」と愛人関係にある。

添乗員の仕事を「まごまごする羊を脅したりなだめたりする牧畜犬のような役目」と軽視し、観光地の説明は「パンフレットに書いてあることを空んじているだけ」にすぎない。さらには「旅行会社の社員に知性も教養も要らねえよ」と自嘲する。

また、他者、特に女を軽視し、ツアー参加の老婆らを、名前ではなく「しみ」「歯抜け」といった侮蔑を含んだ呼称で内心区別する。愛人の「へんに疲れている様子」に向き合っても、「女の疲れたの、苦しいの、くたびれたの、という事などに彼がいちいちつき合っていたらたまったもんじゃない」と意に介さず、妻への態度に至っては「機嫌の悪い時は、物も言わず、殴りつけ」る。

「誰も彼をもだましている気がした」と彼は思うが、「だます」行為は、「相手が自分より物事を知らない」と判断したときにできる行為であり、「だましている」ような意識を持つことは「彼」が他者を下に見ていることの表れにほかならない。

作品中、「彼」の名前は地の文には一切登場しない。愛人が「ヒロちゃん」と呼ぶだけである。この「ヒロちゃん」でさえ、男女どちらにも使える呼称であり、匿名性が大きく損なわれるわけではない。そして「彼」は、「彼」が似ていると言われた歌舞伎役者の呼称を間違える。それを老婆らは指摘しつつ、「どっちでもいいこと」と受け流す。これらは、「彼」という「個」の名前が不要であることを強調する意図によるものであろう。名前の側面から考えれば、「彼」はどこまでも匿名性の高い、極言すれば、「不特定多数の中の誰でもいい誰か」という存在なのである。

では、作品としての『浄徳寺ツアー』はどのような構造を持っているのか。

人称形式は三人称である。しかし、視点は一人称の作品のごとく常に主人公に寄り添っており、読者は作品中のツアー参加者と同様、添乗員「彼」とともに作品の中を移動するしかない。そして本編の始まりは「浄徳寺」であり、翌日、再び訪れた「浄徳寺」で物語は終わる。この作品全体が、語り始めの場所へ戻る円環状の「ツアー」の構造となっているのである。

Hosei University repository

以上から、団体旅行「浄徳寺パッケイジツアー」と作品『浄徳寺ツアー』はともに、「誰でもいい誰かとともに、各ポイントを経て出発地へ戻る」ものであるといえる。

二　四つの観点から

（一）産む

初日の浄徳寺で、「もう産まれただろうか」と「彼」が考えるところから、「産む」にまつわることは「初潮」「水子地蔵」などの形をとり、通奏低音として作品全体に影響を及ぼしている。出産に関心がないように見える「彼」だが、「彼」はその当日に仕事を休まないことによって、わざわざ逃げている。ひどく意識しているのである。

「彼」が妻の出産について考える直前には、次のような場面がある。

彼は、思いついて、一皿十円の豆を買った。いきなり鳩は群がった。（中略）男は、鳩を左の手で力をこめて、たたき落とした。（中略）鳩は女の子めがけて殺到した。いったい何羽いるのだろう。鳩は、頭に乗り、肩に乗り、男のコートのすそをしっかり握った手、腕に乗り、鳩どうしで争う。（中略）「ちょうど餌がなくなるころだから、もう」彼は言った。「鳩だって必死だ」

鳩の、餌への執着と争いが描かれる。翌日、浄徳寺へ再訪した場面でこれらの鳩は交尾し、その雌を別の雄が誘う。生命維持のための食べ物に群がり、同じ種同士で争って生殖活動を行うそれらの姿は、生きるものの素のままの姿であり、また、「産む」ことを意識しながら見つめたときには、餌に殺到する姿だけでも、受精しようと必死に突き進む精子と重なろう。「彼」の中に、出産を意識する部分が色濃くあったからこそ、この直後、妻の出産のことを考えたのである。

その夜「彼」は、他人事のように和尚に語る。

「ひょっとすると産まれてるかもしれない。いまごろ、女房のやつ、産んだ産んだ、と言ってるかもしれん。男は種を仕込むだけで、子供が産まれるなんてわからんもんですね」

男である「彼」は自分の子供の誕生を身体で実際に感じることができず、さらに、「本当に自分の『種』なのか」ということすら自分自身の感覚では確認できない。翻って女は、確実に自分の子供である他者を体内で育て産み出すという機能を持つことによって、思考を巡らす必要もなく身体感覚のみで他者の存在を明確に認識することができる。他者の存在を明確に認識できるということは、相対するものとしての自らの「個」を認識できるということである。ここから、男という性は他者の存在が自身にとって希薄であるがゆえ、相対する自分自身の「個」の認識自体希薄であるということになろう。

中上がのちにこだわった「うつほ（空洞）」という概念をた

Hosei University repository

ぐりよせれば、女は身体に子宮という「うつほ」を持つが「個」として確立した存在であり、男は「うつほ」のない充実した身体を持つが、存在としては「うつほ」を抱えているとも換言できる。

添乗員である「彼」の勤務地や添乗団体は毎回違う。一つの土地に精通するわけでもなく、同行する他者との関係を築くわけでもない。「丸まる棒読み」するパンフレットの知識も、ツアー参加者との関係も、「彼」という匿名の空洞の外側を滑るだけである。内側に空洞を抱えているならば、身体という壁がいかに堅くても、存在自体はもろい。「彼」が他人の性交を見物した後、「自分が、意外に、もろくなっている」と思う場面は、それを端的に表現している。

自分のもろさ――「うつほ」を感じた後、愛人の母の自殺を和尚から聞かされ、彼はやっと愛人の涙や「へんに疲れている様子」がなにによってもたらされたものかを考えたのだろう。生と死、他者との関係、「産む」性と産まれた人間との存在の意味などである。だからこそ、他人事のように妻の出産のことを語りながら、「彼」の中にはいらだちを伴う問いが湧き上がったのである。

いまごろ、産み出そうとして、彼の女は力みかえっているのだろう。いったいそれは人間の子か、と思う。もし、猿の仔でもない犬の仔でもない正真正銘の人間の子なら、いったいなにをしにこの世に産まれてくるのだろう。和尚に訊いてみたい気がした。おれたちは、いったいなにをしにこの世界に来たのだ？　生まれて、姦って、死ぬためか？　おれの子供は、生まれて、姦って、死ぬために、女房の腹の中から子宮を蹴って、外に出てこようとしているのか？　なにかもっと別の方法がないのか？

「彼」は、子供を「親の快楽の滓にしかすぎない」「吹出物にすぎない」などとしながら、自分との性行為によって妊娠しない愛人を、不妊のいわゆる石女とは考えず「ウマが合わない」と評する。「子供ができること」を、無意識に男女の関係の上位においていることが露呈される。

この観点からは「生まれて、姦って、死ぬためか？」という疑問には、まさにその通り、と返すことができる。人間だけではなく猿でも犬でも、この世界に生を受けたそれぞれの「種」の究極の目的は、「個」ではなく「種」の存続であり、それに即して言えば、「姦って」同じ「種」の継承者をつくることが、「種」全体の使命だからである。これは特定の「個」に求められるものではない。「種」のうちの「誰でもいい誰か」が増やしていけばいいからだ。

「彼」は自分の子供について「オギャアと泣くのだろうか、いや、泣けなくとも、眼が額に一つしかなかろうと、指がアヒルのように水かきでくっついていようといい」と思い、また、翌日の浄徳寺で白痴を見つめてこう思う。「こいつも人間とは思えない顔をしている、と思う。だが、生きている、と思う」

ここに表れる、「生」を全肯定する態度について、川西政明は『昭和文学史』（講談社、二〇〇一年）で「どんな子供であれど

Hosei University repository

んどん生まれてくればいいというのが中上の基調となった路地の思想」としており、実際、のちの作品にはそれが明示されている。

「減るんでなしに増えるんやさかね」
その一言で私は解った。私も女親のその考えでこの世に生を受けた。
（「妖霊星」[2]）

「十人猿のように獲られて死んだなら死んだ者の事を考えて悔やむだけではなしにその十倍も人間を産せ増やしてバンバイと言いつづけて来た」
（『千年の愉楽』）

「生まれて、姦って、死ぬため」にすべての「生」は生を受ける。「別の方法」などないのである。そのような思想の萌芽があったからこそ、中上は、「彼」の言葉「男は種を仕込むだけ」の中に、「種族」の意味をも意図して組み込んだのだろう。

（二）見る

「ツアー」について、もう一つ特徴的なのは「見る」ことの重要性である。例えば、実際に行われている観光ツアーの内容を確認すると、「車窓観光」などという文言を多々目にするだろう。これは、バスなど移動する車内から観光ポイントを見るだけのものである。つまり、ただ「見る」ことすらも「ツアー」では目的の一つに数えられるのだ。

では、「見る」ことはこの作品でどのような意味を持っているのだろうか。

添乗員「彼」が、ツアーに目を配る「見る」立場であることは言うまでもない。そのうえ、「息抜き」と称して他人の性交を見物にまで行く。だが後味は悪く、家に飾っていた自分の写真（「彼」は、自分自身をすら「見る」対象にしていたのである）を妻が捨てたことなどを思い出し、「彼」はいらだっていく。

このいらだちは「彼」に明確な名前がないことに深くかかわっていよう。名前は、他者との関係から生まれるものである。誰にも見られずにいる限り、人であれ花であれ、その存在に名前は与えられない。「彼」に与えられた名前は愛人にとっての「ヒロちゃん」がすべてであり、ここから、「彼」とその他の人間との希薄な関係、本質的な孤独が垣間見える。

出産予定日の夜、「彼」は愛人との性交を誰かが覗いていることに気がつくが、「のぞいていてもいい、いやのぞいてこそくれ」と思う。人間は、誰かに見られ、認識されていることを実感することではじめて、自分が他者に対する「個」として存在していることを確認できる。見ることは一方的な行為であり、見るだけの行為から他者との関係は深まらない。「見る」だけの人間はただ孤独な、自身の「個」さえあやうい存在なのである。それを感じた「彼」はこのとき、「見るだけの存在」＝「孤独な存在」であることを拒否したのだ。

Hosei University repository

(三) 白痴

登場人物の一人に、白痴・みよこがいる。彼女の発する言葉は「みよ」と「うち」のみである。これらは、その場にいる（またはその場から移動する）ことを嫌がる場面で多く発せられるため、素直に読むならば、前者は自分の名前「みよこ」、後者は「家に帰りたい」という意思表示にとれよう。だがこの二語は、他の言葉にも読み替えられる。「みよ」は「見よ」「御代」、「うち」は、関西弁で「自分」の意の「ウチ」（父親が関西出身であることが示唆されている）、さらには、「自身の内部」の意の「内」である。特に、白痴が初潮を迎えた場面でこの二語が繰り返されたことに注目したい。彼女は内部の異変と同時に、自分の身体が持つ「うつほ」にも気づき、「体の内側（「みよこ」の内）」の変化を訴えながら、「個としての『自分』を見てほしい（見よ、ウチ）」と望んだのではないだろうか。

白痴の初潮を知り、和尚は「哀しいもんですなあ」と、ツアー参加者の男は「かわいそうにねえ」と言うが、後者に対しては老婆の一人「しみ」が、「かわいそうじゃありませんよ。あなた、男だから、そんなことわからないの」と言い返す。「しみ」は、白痴の初潮を「めでたい」と寿いだ唯一の人間である。性病で気が狂った姉を湯治場に連れていった思い出を持つ、それゆえに「女」の悲惨を肌で知っている彼女のその言葉と寿ぎは、「うつほ」と「個」を持つ「女」であることの力強さを感じさせる。そして、前者に対して「彼」がまず違和感を覚えたことは注記に値するだろう。前述した「生の全肯定」への布石となるからである。

初日の浄徳寺で、白いタイツ、同じく白い毛糸のパンツを身に着けた白痴は笑わず、鳩の餌である豆を握った手を開かない。だが翌日の浄徳寺で彼女は「赤と桃色のストライプの上着、黄色のスカート、赤いコート」「毛糸の赤いパンツ」をまとって笑い、開いた手のひらに豆をのせる。無垢で性的にニュートラルなイメージの白に守られた、閉じた存在から、「産む」機能を持つゆえ月経という赤い「血」とともに生き、「個」を持つ「女」に変容した印象を与える。「産む性」となった女の、聖母性だけでなく、自分を見る他者に対して開いた存在である娼婦性も表れる姿である。

この作品を通して白痴は、「産む」ことと「見る／見られる」ことを重層化した存在となっていたのである。

(四) 固有名詞

匿名性の強い「彼」とは対照的に、愛人「関口由起子」は常にフルネームで表記され、「個」が強調される。その苗字を単漢字レベルに分解すると、「関」「口」はともに境界を意味し、中間点もしくは転換点のイメージが喚起される。そして、名前の「由」は「よりどころ、手段」などを意味し、「起」からくる「物事のスタート」、「子」の「幼いもの、人生の始めの時期」といったイメージをより強調しているように思われる。つまり頻出するこの名前は「次のステップとの境界」や「新しい始まりへの手段」といった意味を与えられたのではないだろうか。

さらに「彼」が「ひょろ高いビルの四階」という位置にいるのに対し、関口由起子の会社は一階にある。彼女のいる場所は、

Hosei University repository

そのビルにとって始まりの場所なのである。

また、水子地蔵からの帰りに「彼」と「関口由起子」、老婆らが休憩する喫茶店の名は「水車」。不可逆の流れと円環とが接するものである。

頻出する人名「関口由起子」と、作品の中間地点で一度だけ使われる店名「水車」、この二つの固有名詞の名づけに際し、中上は細心の注意を払っている。

三　作品背景としての中上健次

（一）二四歳

異父兄が自死した二四歳という年齢は、中上にとってある種の到達点として意識されていた。その年齢を越えた後、「生」に対する中上の思想は二つの原因によって一つの方向へと向かい始めたように思われる。

原因の一つは、到達点を越えたことそのものである。進行方向に到達点がある場合、人間はそこをゴールとした直線の運動のみを意識する。しかし、死と重ねられた到達点を越えてもなお、越える前とそう変わらない日常が続くということを知ったとき、「生を受けて存在している意味」を考えずにいられるだろうか。

もう一つは、結婚し、子供を持ったことである。「妻という女」が間近にいる場合、その生の形状をも日常のものとして見ることになる。

時間的形状から女を見つめると、女が、社会で共有される暦の他に月経という暦を持つことをまず認識するだろう。そしてその暦は、個別の周期で繰り返される。

誕生を「無からの発生」死を「無への回帰」と捉えると、その間にある生の形状は、「無」を起点／終点として円を描く。次に、人間をはじめとする動物の一日を、目覚めと眠りの繰り返しと捉えると、無意識から意識活動を経て無意識へ戻るという円環構造が見えてくる。動物の「生」は、巨大な円環「一生」の上を、成長・衰退という不可逆的な直線運動を目に見える変化としつつ、小さな円環「一日」を繰り返して移動することになる。しかし、生のさなかにある人間――特に「男」――が、この円環構造を自然に認識するためには、「一生」は大きすぎ、「一日」は小さすぎる。だが「女」は、そのマクロとミクロの二つの円環の他に、月経という円環を持っている。日常生活の中で自然に認識できる等身大の円環を繰り返して生きる「女」が間近にいることで、中上は生きることが持つ円環構造に目を向け、その無から無への、または起点と終点が重なる円環上を不可逆的に移動していく「生」の意味を見つめたのではないだろうか。[3]

身体的形状から女を見れば、前述したように「うつほ」を持っている。その「うつほ」という空洞を、「空洞」と認識させるものは、無を囲む円環状の輪郭である。ゆえに「女」は、誕生から死に至る人生に重ねられる「円環」を、時間的・身体的形状というわかりやすい形でその「生」の本質に持っているといえる。

先に、「各ポイントを経て出発地へ戻る」ことが「ツアー」

Hosei University repository

の目的とした。これは、円環構造を持つ「生」の目的とも換言できよう。「生」「ツアー」は、その形状によって、「女」と深く関連づけられる。他者を産む性である「女」と重ねると、ただの「生」「ツアー」そのものに、創造性も内包されていると考えていいだろう。生物の死亡率は、一〇〇%である。死を目的として生まれたならば、「生」の過程など必要ない。いっそ誕生もしなければよい。だが、「生」を受けた以上は、小さな円環を繰り返しながら大きな円環の上を不可逆にゆく、何らかの創造性を内包した「ツアー」であるその「過程」こそが目的なのだ。

二四歳というトポスを越えて生き、この作品が書かれた時点で、そのような方向の思想が中上の中で蠢いていたのである。

(二) 変わる過程

「彼の女」は、「彼」の拒否によって堕胎を繰り返してきたが、これが最後のチャンスになるからと出産を決意した。彼らの堕胎は、生活を変えたくないという意識から行われていたものだった。だが、「変わらない」ことは、変わるリスクを回避するだけではなく、その先の可能性を潰すことでもある。出産を「彼」が承認した時点で、彼らは「変わる過程」に入ることになる。

「なによ、いったい、これ」と、目の敵のように彼の写真を言った。「みっともないと言ったらありゃしない」そんな女をみながら、彼は、ひょっとすると年貢の納め時なのかもしれないと思うのだった。いや、いまなら、まだ間に合うと思うのだった。まだなんとかなる。

出産を控えた「彼の女」が否定するのは、「彼」が誇る「過去の『彼』」である。「年貢の納め時」からは、過去の栄光を手放して新たなステージへ向かおうという意識が、「いや、いまなら、まだ間に合うと思うのだった。まだなんとかなる」からは、変容への不安と揺れが見えてこよう。「彼」は変容を選択しながらも揺れる過程にいるのである。

ではこのとき、中上はどのような時期にいたのだろう。

中上は、『浄徳寺ツアー』の七カ月前に発表した『修験』から、デビュー以来の一人称「ぼく」を捨て、三人称「彼」に転換した。これは、作品を書く上での視座を主観から客観に変えたことを意味している。

また、これ以前の作品で、「自殺」や「死」は中上自身を色濃く投影した主人公の側にあったが[4]、『浄徳寺ツアー』では老婆らの親族たちの死や愛人の母の自殺という解体された形で提示され、そのことが主人公に与える精神的影響も深刻なものではない。加えてこの作品において中上は、「彼」の育った家庭環境を明かさない。中上が、それまでの作品の主人公たちを支配してきた私的な背景と一度距離を置くことで、次のステージへの転換を図ったことは明白である。実際、特殊な家庭環境を背景に持つ人間として描かないことは、不特定多数の生を主人公に重ねる、この作品で意図された「彼」の匿名性を高めることには成功している。

Hosei University repository

ここで、鎌田東二の論説を引用したい。

そもそも最初から中上健次は遊行と土着の二つの相をおのれの文学世界の根幹に刻みつけていたといえる。初期の『十八歳、海へ』や『灰色のコカコーラ』や『十九歳の地図』は逃亡遊行者の貌を刻み、『岬』や『枯木灘』や『熊野集』などには、どのようにも紳士とはいいかねるが仮面土着者の貌が深く刻印されている。

（「中上健次と紀州」『国文学解釈と鑑賞　別冊　中上健次』至文堂、一九九三年）

大変妥当な分類であり、挙げられた作品だけをこの観点から分類すると、「逃亡遊行者の貌を刻んだ」初期作品＝一人称、「仮面土着者の貌が深く刻印された」『岬』など＝三人称と、人称形式についても迷いなく分けることができる。

が、この観点から見る『浄徳寺ツアー』は、『十九歳の地図』の後、『岬』の前という執筆時期も含めてどちらとも言いがたい。人称形式は三人称である。しかし、一人称で書き続けてきた作家が、人称転換だけをもってスムーズに三人称的視点を得られるものではない。三人称で書きながらも、三人称的視点を獲得するまでの過程において、一人称的視点は引きずることになるだろう。

そして、「彼」が生まれ故郷の和歌山から離れた人間であることは「逃亡遊行」ととれるが、現在住む土地では定職に就き、妻を娶り、子供の誕生も控えていることから、「土着」への過程にあることが明白である。さらに「添乗員」という職そのものが「逃亡遊行」と「仮面土着」のどちらとも言いがたい。生業として行われるその移動は、出発地へ戻ることを大前提としているからである。

これらを総合すると中上は、逃亡遊行語りを引きずりながら、『岬』以降明らかになる「土着」に向かう「どちらとも言いがたい」時期にいる自身同様、変わる過程にあって根をまだ張りきらない存在として、「彼」を設定したのではないだろうか。

ここで、「彼の女」の出産に立ち返りたい。「彼の女」の「難産」とは、妊娠と出産が「彼」自身に起因するものであり、「難産」自体が杞憂にすぎないかもしれないことを考えれば、中上の意識の表象であろう。作家の出産とは、作品の誕生である。とすると、「彼の女」という呼称も、「彼の中の女」＝「自分の中の『産む』力を持つ部分」という意識から使われたものとなり、出産の時を迎えているのは、「彼」自身となる。

だが、「眼が一つでも水かきがあってもいい」という、生の全肯定の発現の直後に見た夢で「彼」は、女の胎内の「六つぐらいいる感じ」の「赤ちゃんたち」を「一匹ずつしめ殺してやる」と笑う。この相反する描写は何を意味するのか。

産まれてくるその存在が不要ならば、まとめて捨ててもいい。わざわざ「一匹ずつ」「しめ殺す」行為は、個々の命を自身の手で感じることになる。これは「個」の「生」を、切実さを持って感じたいという意識の表徴ととれよう。さらにこれは、胎児の段階での会話である。中上の中には新しい作品世界の萌芽があった。三人称というスタイル・視点が中上の中で根を張り始

Hosei University repository

め、「兄の自殺」に代表される私的で切実な背景や「作家としての難産」を客観的に見る姿勢を獲得しつつある、責任と手ごたえのあるその過程を感じていたのではないだろうか。

作品中、「彼」の子供が産まれたかどうかは判明しない。自分が作家として過渡期のさなか――「産む」存在になる自分を自分自身の中から産み出すという難産の時期にあるということを認識していたのだろう。

しかし、絶望的な状況ではなかったようだ。夢の中で彼の女はこう言っている。

「つわりはひどかったけど、時期が短かかったから。それだから皆んなけっこう元気がいいの」

みずみずしい希望に満ちた言葉である。

(三) 他作品の萌芽

『浄徳寺ツアー』が落選した回の芥川賞の講評で永井龍雄は「猥雑な人間の一団を、一団として扱う手法に新鮮さ」[5]があるとし、『岬』で受賞した回でも「一群れの人間を浮出させるのに、すぐれた筆力を持っている。前の候補作『浄徳寺ツアー』でそう思ったことを、今度もあらためて感じた」[6]と、同様の観点からの講評を述べている。同じ回で瀧井孝作は「前回の候補作『浄徳寺ツアー』には、団体旅行の猥雑味が描いてあった」[7]としており、少なくともこの二人には、この作品におけるツアー参加者の描写が猥雑性の表現と捉えられていたのだが、それには違和感を覚える。団体旅行における猥雑性とは、全く違う背景を持つ人間が集められ、非日常の中でそれぞれの本質を露わにしたときにはじめて明確に表出するものではないだろうか。しかしこのツアーの参加者はみな、同じ寺の檀家である。ここに描かれた人間の群れは、彼らの属するコミュニティーを小さく切り取ったものであり、この作品における団体旅行が猥雑性の表現になると考えてはならないのである。

ところで、このツアーを「小さく切り取ったコミュニティーの移動」と捉えると、のちの作品『日輪の翼』が想起されよう。『岬』以降の中上作品において重要なトポスである「路地」の消滅の後、「路地」の老婆らが日本各地の聖地を巡る旅の物語であるが、その中の老婆らはまるで「路地」ごと移動しているかのように、「路地」的生活を各地で再現する。また、『浄徳寺ツアー』で京都の思い出として語られた、寺社（もしくは観光名所）を掃除する老婆らのイメージは、『日輪の翼』で最後の聖地・皇居を掃除しようとする老婆らと二重写しになる。

さらには、「浄徳寺パッケイジツアー」が催行された理由に関口由起子の母の自殺があったことも注視したい。母という重要な存在の事件的な消滅(自殺)によって、そのコミュニティーにいた人々が「聖地」へ移動するという動きは、宿命の土地「路地」の事件的な消滅によって老婆らが聖地巡りの旅に出る『日輪の翼』の、極めて素朴なプロトタイプであるように思える。もちろん『浄徳寺ツアー』執筆当時、「路地」というトポスは確固たるものとはなっておらず、実在する「路地」の消滅も始まってはいなかったのだが。

Hosei University repository

しかし「路地」は、中上の中で蠢いていた。回想で「彼」は、「千毒坂」という地名に興味を持ち、それについて旅館の女中に尋ねている。

「ああ、あそこですか、由緒あるいわれなどなんにもないですよ」と言った。「あのあたりに住んでる人は、体に千の毒があるっていうことなんでしょ。あのあたりの人は、自分たちは平家の子孫だと言ってるけど」と事もなげに言った。「お客さん、なんにも訊かん方がいいですよ。いまあそこはそんな名前ないんですから」女中は、彼の顔をみつめた。千毒坂、変に、その名に心ひかれた。

「千」は「賤」と同一の音を持ち、平家の子孫であり体に千の毒を持つという人々は、のち『千年の愉楽』を中心に語られる、高貴で澱んだ血を持つ「中本の一統」を想起させる。事もなげに話しつつ「なんにも訊かん方がいい」という女中の態度は、「路地」――「賤」たる被差別部落に対する周囲の態度そのものだろう。

「彼」は「千毒坂」に向かうが、「聖坂」で会ったポン引きについて行ったため、辿り着いたかどうかはわからない。ここに垣間見えるものは、「路地」を中心とする紀州サーガを展開し始める前の、中上の逡巡だろう。

のちの作品の萌芽はまだ見られる。例えば白痴とその背景である。老婆の一人は、白痴の母親が若い男と駆け落ちしたと語るが、そこには『枯木灘』とのつながりが感じられる。

「しょうないことじゃ、どこにでもあることじゃ」男は言った。低く声をたててわらった。「そんなこと気にすんな。秋幸とさと子に子供が出来て、たとえアホの子が出来ても、しょうないことじゃ。アホが出来たらまあ産んだもんはつらいじゃろが」

「アホをつくったるわ」とさと子は言う。

「つくれ、つくれ、アホでも何でもかまん。有馬の土地があるんじゃから、アホの孫の一人や二人どういうこともない」

（『枯木灘』）

異母妹・さと子との近親相姦を告げる主人公・秋幸に対しての、「男」――実父の反応である。濃い血縁関係にある男女の性交が「アホの子」白痴を産み出す可能性が、当たり前のことのように語られる。また、「産んだもんはつらい」という言葉には、『浄徳寺ツアー』における白痴の母の出奔の理由――「若い男」が直接の引き金となったかもしれないが、「白痴を産んだこと」は、その土地で生きる辛さのベースとなっていたのではないだろうか――も匂わされている。だが、それを踏まえてなお、「つくれ、つくれ、アホでも何でもかまん」と、倫理を越えた生ですら全肯定されるのである。

先に述べたように、この作品で白痴は「産む性」への変容を遂げた。中上が『岬』以降の作品で重要な舞台とした「路地」は、「アホな人」によって開闢されたと『日輪の翼』では語ら

Hosei University repository

れる。中上作品においても、もちろん一般的にも、「アホな人」と「白痴」とは単純にイコールで結ばれるものではないが、「白痴」を巡る悲しみをも含めた混沌、さらに白痴や開闢の祖を内包した「アホな人」という一つの「生」からの可能性が、示唆されている。

このように『浄徳寺ツアー』には、中上の次のステージへの土台や材料が、渾然と存在していたのである。

（四）パトス

『浄徳寺ツアー』は、炎のイメージで締めくくられる。

夢の中に出てきた地面に落ちてくだけ、ぱっと赤い炎が広がった火炎ビンを想い出した。なにかもやもやしていると感じたのは、これか、と思った。まだ敵味方に分れて、殴ったり殴られたりしたいのか？　殺したり殺されたり、鉄砲で撃ったり、槍でついたりしたいのか。彼らの方へ和尚に先導されてぞろぞろ歩いてくる老婆たちの後の、浄徳寺が、炎を噴き上げていた。いや、一瞬、光の加減で、そうみえた。火の粉をとばし、音をたてて燃えていた。ごうごうと鳴った。「みいよお」と白痴の子が言った。わらった。鳩が、ばたばたと翔びあがった。

直接的な表現だけでなく、この場面で白痴が着ている服の色（赤、桃色、黄色）とストライプ柄もまた、燃え上がる炎を連想させる。

「男」の「うつほ」については前述した。ここで、実際に空洞を持つさまざまな物体を思い浮かべたい。それに点火したとき、空気を含む分、火炎瓶同様パッと燃え上がるだろう。一過性の強烈なパトスを主体とする「男のオルガスムス」のありようと二重写しになる。

前述の「息抜き」の後、テレビで火事を見て「彼」は考える。

変態でもいい。いい感じになりたい、大オルガスムスを味わいたいと思った。大オルガスムスの前では、子供など屁のようなものだ、と思った。

また、誰かに覗かれながら性交した後、「彼」は回想する。

合宿地の駅前にいる女を買いに行こうと、夜道を走ったことがあった。女とは、あっけなかった。いまとなってみると、夜の暗い道を全力で走ったほうが、鮮明に思い出すのだった。心臓がどきどき鳴っていたのだった。

これらの描写では、目的よりもそこへ至る過程が強烈に意識されることが強調されている。つまり「彼」にとっては、一瞬のパトス、「生」を実感する「過程」が重要であって、その産物（オルガスムスの結果としての子供、走った結果としての女）自体への思い入れは発生しないのだ。

渡部直己は『中上健次論　愛しさについて』（河出書房新社、一九九六年）で、中上が作品内容に深くかかわる矛盾までも放

Hosei University repository

置するさまを「中上健次ほど粗雑な作家はいない」と評している。これは、「記号をめぐる途方もない粗雑さ」とは逆に、物語そのものへの「驚くべき厳密さ」を中上が持つことについて、「その厳密さは、彼が、たんなる再読をこえた独特の注意深さで自作を読み返し続けた作家であったことにかかっている」とする論説からくるものだが、それについては完全には首肯しがたい。

中上はこう述べている。

言葉を書くという行為はいつも、絶えず、その小説家に様々な問を発する。その問に答え切って再度、筆を執っているわけではない。問があまりにも切実で、だから、問そのものを書きつけることもあれば、問の重さを支え切れず、問に圧し潰されて流れだした精神の液のようなものをインクにして、言葉を書く事もある。

（「著者から読者へ　問という大岩」『熊野集』講談社文芸文庫、一九八八年）

書かずにいられないとき、問いそのものや、答えになりきれていないものでもとにかく書きつけるという姿勢である。ここから考えると、精読というほどには自作を読み返すことはしなかったのではないかと思わずにいられない。作家として生きる瞬間、瞬間に彼が対峙すべき物語は、既に文字にしたものではなく、彼の内部に元気な胎児として存在するもの、または絶えず生まれ続ける問いの形をしたものだからである。

中上には、燃え上がる炎のように「書いている瞬間」のパトスが重要だった。その結果として産まれ、世に出た作品は、他者かいっそ過去世のもののように感じていたのかもしれない。粗雑であっても矛盾があっても、それらはもう産み落とされたものであり、「心臓がどきどき鳴って」いる瞬間こそが彼の「生」であり「作品」だからである。

終章

最後にラストシーンを再度引用する。

「みいよお」と白痴の子が言った。わらった。鳩が、ばたばたと翔びあがった。

笑いは人間だけができる行為であり、白痴の笑いは、彼女が人間であることの表徴である。ここでの台詞を、「みよこ」「御代」「見よ」を重ねたものであるとすると、「みよこ」という「個」、ひいてはすべての「個」それぞれの「御代」を「見よ」――「自分自身の生を見ろ」、そういったメッセージが読み取れる。

そして、「翔びあがった」鳩は永遠に宙に浮いたままではいない。いつかは地に足をつけることになる。これもまた、地から宙を経て地に戻る円環構造である。だがここで、鳩の飛翔に対し、中上が作品中一貫して「翔」という字を使ったことは看過できない。「飛」よりも高い高度・長い距離の移動を印象づけるこの字は、作品に明るい広がりを与えており、そこからは

Hosei University repository

やはり人生への肯定の態度が見えるからだ。

「ツアー」を経て、生の全肯定へとわずかながら成長する「彼」は、世界に遍在する無数の「個」の姿である。それを念頭に置くと「旅行会社の社員に知性も教養も要らねえよ」という自嘲は、「『生』という円環を生きる上では、ただ生きているだけでよい」という思想ともなる。

「著者から読者へ　問という大岩」（前掲）で、中上はこのようにも言っている。

いや、問うより先に、私は視た。問う事より、識る事より、視る方が先にある。（中略）視た後に、問は始まる。

「見る」という孤独な行為から、生の本質を探る作業は始まるのである。特定の「個」ではない「見る」「彼」によって「浄徳寺パッケイジツアー」という団体旅行と『浄徳寺ツアー』という作品が展開することは、無数の「個」のただある「生」の「過程」を全肯定するこの作品において、必然だったのだといえよう。

「関口由起子」は円環及び「生」の無数の通過点の始まりを体現し、「白痴」は、人生の意味など考えることもないその存在をもって逆説的に「生」を思わせ、ただ二語を繰り返すことで「内側を見ろ」と語りかけている。

生を全肯定し、このような登場人物を配した作品を、「個人的な憤りをたたきつけている作品」と呼べるだろうか。中上は、個人的憤りに満ちた初期短篇の時代を既に抜け出し、私的な背景を客観視する位置へ移動しながら、これから産まれ出るであろう物語たちの不可逆の成長を自分の内側で感じていた。

川村二郎は、発表されたばかりの『浄徳寺ツアー』に対し、「ふしぎにさわやかな後味を残す」[8]と評している。「生」は常に過渡期であり、通過点は無限に存在する。それを知り、自身にとって重大な通過点の一つを越えようとする若い作家の姿勢が、この読み手には受け取ることができたのだ。

個人的憤りを「書く」作家から、他者の苦しみを含んだ混沌たる世界を「産む」作家へと変容する過程に中上はいた。円環上を不可逆的に移動し続ける「生」の、終わらない過渡期である移動の過程こそが人間が生を受けた意味であると、過渡期を自覚していた作家・中上健次は、「ヒロちゃん」を主人公とした『浄徳寺ツアー』によって示したのである。

注

（1）『芥川賞全集』第一〇巻（文芸春秋、一九八二年）四三五頁

（2）中上健次『熊野集』。以降、著者名について特記のない引用作品はすべて中上健次著。

（3）ただし中上の結婚は、妻の妊娠がその決定打となったため、月経中断中の「女」との生活で中上がまず意識した円環は、受胎から妊娠期間を経て出産に至る一〇カ月間の、女の身体の視覚的変化による円環とも考えられる。

（4）『浄徳寺ツアー』の八カ月前に発表された『黄金比の朝』でも、この作品同様、主人公にとって他人でしかない人間の自殺が語られる。しかしそれは、語る人間の「兄」が「三月三

Hosei University repository

日に自殺」したというディテールを持つという点では、初期作品に共通する「中上自身の経験談」の域を出ない。

(5) 前掲注(1)四三一頁

(6) 同右四三九頁

(7) 同右四四〇頁

(8) 「読売新聞文芸時評昭和五〇年四月号」『文学の生理』(小沢書店、一九七九年)

参考文献(図書)

井口時男『危機と闘争　大江健三郎と中上健次』(作品社、二〇〇四年)

木村一信『不安に生きる文学誌——森鴎外から中上健次まで』(双文堂出版、二〇〇八年)

高澤秀次『評伝　中上健次』(集英社、一九九八年)

友常勉『脱構成的叛乱　吉本隆明、中上健次、ジャ・ジャンクー』(以文社、二〇一〇年)

中上健次『中上健次全集』(集英社、一九九五～一九九六年)

『別冊太陽　中上健次』(平凡社、二〇一二年)

『早稲田文学』(早稲田文学会、二〇〇〇年一一月)

参考文献(論文)

倉田容子「中上健次『日輪の翼』における移動——非『仮母』としての老婆たち」、(『日本近代文学(七五)』(日本近代文学会、二〇〇六年五月)

(みやじま　ゆか・通信教育部四年)